

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第205次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、藤原宮中枢部の様相解明を目指し、大極殿院の調査を継続的におこなっています。今年度は前号でお伝えしたように、東面回廊の未発掘部分と、昨年度の調査でみつかった大極殿後方東回廊の北方に位置する内庭部にかけて、1,505㎡の調査区を設定し、東面回廊の柱位置の確定と内庭部の整備状況の解明を目的として、調査を実施しました。本稿執筆時点では、調査も大詰めを迎えており、成果をお伝えします。

今回の調査では、東面回廊の柱位置や先行四条条間路の側溝等を確認しました。調査の成果は大きくわけて二つあります。一つ目は、東面回廊のうち、大極殿後方東回廊と北面回廊の間が12間で割り付けられ、桁行は13.5尺を基本とすることが判明した点です。これまでの調査で、東面回廊のうち大極殿後方東回廊より南方や北面回廊・南面回廊は、基本的に桁行を14尺で割り付けていることがわかっており、今回の調査で、東面回廊のうち大極殿後方東回廊より北方の範囲のみ、それよりやや狭い間隔で柱が配置されていたことが確認できました。このことから、大極殿後方回廊の北と南で計画や造営の過程が異なっていた可能性があります。



調査区全景(北東から、大極殿・畝傍山を望む)

二つ目は、内庭部で、建物の明確な痕跡が確認されなかった点です。昨年度の調査で、大極殿の後方に東西方向の回廊を発見したことから、前期難波宮の内裏前殿区画との構造的な類似性がいっそう高まりました。前期難波宮では、内裏後殿の東に脇殿があることがわかっており、今回の調査では、藤原宮にもそれに相当する建物が存在するかどうかの確認を目的の一つとしていました。しかしながら、今回の調査では、前期難波宮の内裏後殿脇殿に相当する明確な遺構は検出されませんでした。つまり、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画は、規模や回廊の巡り方に類似性がみられるいっぽうで、建物配置には相違があるということを示しています。これは、古代宮都の変遷を考える上で重要な成果だと考えられます。

そして、11月7日には現地見学会を開催しました。現場の運営と同様、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策をおこなった上での実施となりました。受付では、検温と手指の消毒をお願いし、また三密を避けるため定時解説はおこなわず、調査区周辺に研究員を配置し、適宜質問に答える形としました。時折、小雨がぱらつくなかでしたが、480名もの方々にご参加いただきました。皆様、ありがとうございました。

(都城発掘調査部 鈴木 智大・若杉 智宏)



見学会受付(検温と手指の消毒をお願いしました)